

4番目の許婚候補 2

M a n a m i & A k i b i t o

富樫聖夜

Seiya Togashi

ternity



エタニティ文庫

目次

書き下ろし番外編 思いがけない再会	327
秘する花を知ること side 田中雅史	315
後日談	279
4 番目の許婚候補 2 <small>しいなずけ</small>	5

4 番目の許婚候補 2

第1話 4番目の許婚候補と上司の関係

「上条さん、すまないが教育事業本部に行って、この資料の最新版を貸りてきてくれな
いか。データが更新されていると思うから、確認しておきたいんだ」

仁科係長がそう声をかけてきたのは、プレゼン資料作成のために残業している時
だった。

「はい。分かりました」

就業時間中からずっとパソコンと格闘していた私は、気分転換しなかったこともあつ
て、二つ返事で一つ下の階のフロアに向かった。

私——上条まなみは、このSAEKI情報システム株式会社の新事業推進統括本部と
いう部署に所属している入社二年目の平社員だ。企業調査チームに所属しつつ、部内の
秘書業務の補佐もしている。二足のわらじ……というところ、さも有能そうに聞こえるかも
しれないが、要するに雑用係のようなポジションだ。

それもこれも、すべては先ほど私にお遣いを命じた麗しの上司——仁科彰人係長のお
達しによるもの。

係長は私より四歳年上の二十七歳。社員の多いこの会社で、入社五年目にして係長に
昇進した切れ者だ。頭脳明晰なだけでなく端整な顔立ちと色気のある声、そして非常に
柔和な性格でもって女性社員に絶大な人気を誇っている。おまけに存在感も半端なくて、
男性でさえ目を向けずにいられない何か——多分カリスマ性とか呼ばれるものも兼ね
備えている、高スペックな人なのだ。

……本当はそれだけじゃない。実は係長はこの会社を含めた巨大企業、佐伯グルー
プの御曹司でもある。

彼の本当の名前は佐伯彰人。グループを統括している佐伯会長兼社長の一人息子だ。
でもそれは公にはしていない。お母様方の姓の仁科を名乗って、御曹司であることは
隠してこの会社に勤めている。だから同じ部署で働くみんなも、目の前の人が御曹司と
いうことは知らない。知っているのはおそらくごくわずかで、私と……確認はしてない
けど係長の友人で私の直属の上司でもある田中主任くらいだろう。

え？ どうして平社員の私がそんな重要なことを知っているかって？

……実は私にも、ほんのちよつと秘密がある。佐伯家と並ぶ大企業一族、三條家の一
員だったたりするのだ。

現在、その三条家と佐伯家の間に縁談話を持ち上がっている。何でも昔からの約束で佐伯家の孫息子、つまり係長に三条家の孫娘のうちの誰かが嫁がなければならないらしい。

三条家の血を引く孫娘は全部で四人。舞ちゃん、真綾ちゃん、真央ちゃん、そして私だ。曲がりなりにも候補の一人なので、私も佐伯彰人さんのことを知らされるといいうわけ。

言っておくけど、私はお嬢様じゃない。確かに母方の祖父は三条家当主で、私もその孫娘に当たるけど、私の父親は中小企業に勤める普通のサラリーマンだ。家も豪邸じゃなくて郊外の一軒家だし、お嬢様学校に通ったこともない。従姉妹たちとは違い庶民街道を薦進している。

そんな私が佐伯家御曹司の許婚候補筆頭いひなげに選ばれるわけもなく、もちろん最後の最後の四番手だろう。実際係長の許婚筆頭として名前が挙げられているのは、お祖父ちゃんの内孫である従姉の舞ちゃん——三条舞だ。

従って係長は私の存在を知らない。部下が自分の四番目の許婚候補だなんて、きっと夢にも思っていないだろう。

でもそれでいい。私の前に三人も完璧な美女がいるのに、庶民&容姿も十人並の私に、よもや許婚のお鉢が回ってくるはずもないのだから。

尊敬できる上司で従姉の許婚。将来親戚になるかもしれない人。だから特別で、ちょっと気になってしまう人。私にとって係長はそんな人だ。……だよな？

教育事業本部からフロアに戻った私は、小走りで仁科係長の席に直行した。

「駄目でした、係長。定時で上がって誰もいませんでした」

係長は私の報告を聞いて軽く目を見張った。

「そうか。無駄足を踏ませて悪かったね。それにしても誰も残ってないとは珍しい」

「ええ、いつもなら誰かしら残業しているんですけど……。タイムカードを確認したら、みんなすでに上がっちゃっていました」

私は苦笑いした。

そうなのだ。終業時間を過ぎているとはいえ、誰かしらいるかと思っ行って行ってみたら、電気もすでに落とされ、もぬけの殻だった。

「ああ、今日、教育事業本部の女の子たちは飲み会なんですよ」

同じく残業中だった先輩社員の水沢みずさわさんが、私たちの会話を聞いて言った。

「だから今日は絶対残業しないって言ってました」

「飲み会？」

私と係長がハモる。

「そう。提携会社の独身男性たちとね」

にんまりと笑いながら水沢さんは答える。私は彼女の表情を見て、その飲み会が何であるかピンと来た。それは係長も同じだったようで、苦笑しながら言った。

「合コンか」

「その通り」

水沢さんは情報通だ。どこから聞いてくるんだか、他所よその課のことまでよく知っている。「なかなか男前の社員が多いとかで、みんな大ハリキリ。会社にいる時は仁科係長にキヤーカー言ってるのにケンキンなものね」

うちの部署と行き来の多い教育事業本部の女性社員は、既婚者を除いてほぼ全員が係長のファンで、係長が顔を出すたびに黄色い声を上げていた。

おかげでうちの部の用事は最優先でやってもらえるという利点があるけど「仁科係長の近くで働けるなんて羨ましい」と、恨みがましく言われることもしばしばだった。

「合コンが成功して恋人ができれば、係長への黄色い声援も、少しは収まるかもしれないねー」

そう言う私に水沢さんは、ちょっと呆おろれた顔で言った。

「他人事ね、上条ちゃんったら。恋人がいないのは上条ちゃんも同じでしょ。なのに合コンの誘いも片っ端から断つちゃうんだもの。誘われているうちが華なのに」

どうやら話の矛先ほしざきが私の方に向いてしまったようだ。多方面に顔が利く水沢さん経由で合コンに誘われることも多いけど、合コンが嫌いな我が部署のアイドル・川西かわにしさんや私は、断ってばかりいるのでちよつとご不満なのだ。

「いえ、でも私、合コンは……」

「行けないんだよね」

それまで無言で私たちの話を聞いていた係長が不意に言った。え？　と思つて振り向くと、微笑みを浮かべた係長に出くわす。

「上条さんは門限があるから。だよね？」

私が言おうとしていたことを、先んじて言ってくれた。

門限。実は私には門限がある。

それは一人暮らしを許してもらおう条件として、過保護な従兄弟とこたちから出されたもの。一年間、夜の十二時という門限を守ることができたら、一人暮らしを許してもらえるのだ。私が一人暮らしするのに、どうして両親じゃなくて従兄弟の許可が必要なのかというツツコミは、心に留とどめて頂きたい。「約束を守れなかったら妨害する」と公言されている以上、従兄弟の二人に認めさせなければ実現しないのだから仕方ない。

そんなわけで私はこの一年、人付き合いを犠牲にして門限を守り続けていた。そのた

め、飲み会や合コンに行っても、最後までは参加できない。なぜなら、私の実家は飲み会などの会場になる都市部から遠いからだ。というわけで、この半年余りで参加したのって、事情を知っている部署内での打ち上げくらい。それほど数が多くない合コンの誘いは、片っ端から断っている。

だから係長が言っていることは正しい。……正しいのだけど。でも私は内心冷や汗もなかった。

「上条さん？」

「あ、ええ、そうです」

怪訝けげんそうな係長の声には私は慌うろたてて頷うなずく。

「門限があるから途中で抜けなくちゃならないんですけど、合コンは途中で抜けると場を白けさせますからね。だったら最初から行かない方がいいんです」

「ほら、そういうわけだから、仕方ないんだ。無理強むりこいはしっちゃ駄目だよ、水沢さん」
係長は私の言葉になぜか満足そうに微笑ほんで言った。

「さて、合コンの話はそこまでだ。さっさと残業を終わらせよう。上条さん、すまないがプレゼン資料は前のものを使ってある程度の形を整えてくれ。最新の情報は、教育事業本部の課長にメールでもらえるよう頼んでおくから、明日確認しよう」

「はい。分かりました」

私は気もそぞろだったけれど、努めて真面目な顔を作って頷うなずき、席に戻った。

門限のせいで、合コンには大抵行かない。それは正しい。他にも理由はあるけど、係長が言った通り、それが断る大きな理由の一つだ。

だけど、心の中は「あちゃー」という気分だった。昨日の今日で、係長のこの断言はいたたまれない。

なぜなら昨夜、明日の金曜日に合コンに参加すると約束したばかりだから。

第2話 花の金曜日と合コン

『ねえ、まなみちゃん、合コン行かない？』

従妹いとこの真央ちゃん——瀬尾せお真央からそんな電話が掛かってきたのは、昨日の夜のことだった。

『明後日の金曜日、合コンに行く予定なんだけど、友達がインフルエンザにかかって行けなくなっちゃったの。でも人数合わせのこともあるし、穴を空けたくないのよね』

「あのさ、真央ちゃんの行く合コンって学生ばかりでしょう？」

合コンは、立場を同じくする者同士で集まる方が楽しいものだよな？ 社会人には社会人。学生には学生。私は曲がりなりにも一応社会人だ。年下ばかりだろうし、学生と話が合うとは思えない。

——真央ちゃんは私より一歳年下だ。今年の春に大学を卒業したのだけど、まだ学生でいたいと大学院に進学を決めた。

「まだいっぱい描きたいのに、社会人になっちゃうと時間がなくなりそうだから」とか何とか言ってる。

……描きたいものって、BLの同人誌でしょうが！ と思わずツッコんだけど、それを分かっていながら瀬尾の伯父さんも伯母さんも許しちゃうんだもの。娘に甘いよ。甘すぎるよ！

もちろん親戚とはいえ、人様の家庭の方針に口を出すべきではないし、そんな理由で院への進学が許される余裕がある家だということも分かっているけど。

とにかく、一歳違いとはいえ、学生の真央ちゃんが行く合コンと言ったら当然学生同士の合コンだ。

「社会人が乱入したら興ざめじゃないの？ 私は真央ちゃんの大学のOGってわけでもないしさ」

『平気、平気。院生も来るから結構年齢にばらつきがあるし、違和感ないと思うよ。ま

なみちゃんは童顔だしさ。それに人数合わせなんだから、無理におしゃべりする必要もないよ』

「でも私、門限あるから遅くまではいられないよ？」

『分かっている。私もそんなに遅くまでいるつもりないから、途中で二人で抜けちゃおうよ。……ねえ、お願い、付き合ってください！ 誰も捕まらなくてさあ。まなみちゃん、最近仕事もそれほど忙しくないって言ってたから大丈夫でしょ？』

「確かに急な仕事が入らなければ、定時で上がれると思うけど……」

『私を助けると思って、お願い！』

電話の向こうで「お願い」を連発されて、私はため息混じりに合コンに参加することになったのだった——

そして今日は金曜日。正直に言えば合コンはあまり行きたくないのですが、残業でもあればそれを口実に断っていただろう。係長に「門限があるから合コンなんて行かないよね」と断言された今は、なおさらだ。

だけどあいにく、今日はあまり忙しくなかった。プレゼン資料の準備も午前中で終わらせてしまい、予定通り残業もなし。そして間もなく終業時間を迎える。

結局、定時きっかりに上がれちゃった私は、真央ちゃんとの待ち合わせの場所にしぶ

しぶと向かった。

合コンは、大学生の頃に何度か行ったことがある。社会人になっても付き合いで数回くらいは行った。でも一番多く誘われたのは大学一年生の時。当時私は男の人が傍に居ることすら慣れてない時期で、結果は散々。話しかけられるたびにビクビクしているような女と知り合いになりたがる男なんている？ 容姿がよければ誰かの目に留まったかもしれないけど、お世辞にも美人とはいえない私に、積極的に話しかけてくる人もいなくて——いてもまともに話せなかっただろうけど——隅っこの方でチビチビとジュースを飲んでるだけだった。

さすがに数年経つと、男の子の近くに寄ってもビクついたり話しかけられて顔が赤くなることもなくなっただけど、その頃には合コンに誘われることが少なくなっていた。友人たちも、合コンが苦手な私に気を遣ってくれていたみたい。だからそれからは、ちょうど今日のように人数が足りない時に、拝み倒されて参加するだけ。

そんな時も私は、別に彼氏が欲しいとか思ってたから、積極的に会話をする気にもなれずに、または隅っこでお酒を飲んでいた。ちっとも楽しくなかった。

それに、合コンに参加すると、やたらと従兄弟の透兄さんと涼がうるさかったのも敬遠するようになった一因だ。

合コンのことをどっからか聞きつけて——情報源は私のお父さんかお母さんだと思われる——電話で説教するわ、お祖父ちゃんの家で顔を合わせれば「若い男の下半身事情」なるものを延々と聞かされるわで、うんざりさせられた。

長年の女子校生活により患っていた男性恐怖症が治ったところだったので、今度は男性嫌悪症にさせるつもりなのかと疑ったくらいだ。

でも、あいにくと「若い男の下半身事情」には多少の知識があったので、笑い飛ばしただけ。

まったく、女子校を舐めないでもらいたい。共学より男女の性事情があけすけなんだからねっ！ 男の目がないのいいことに、彼氏との性行為を教室で赤裸々にぶちまける子もいるのだ。下手だの早漏だのという感想付きでね！

——って言ったたら、すごく怒られた。

自分たちは平気で私に聞かせるのに、他の人が私にそれを教えるのは駄目なんて、どこまで心が狭いんだろう。男って勝手だ。……いや、勝手なのはあの二人だけなのかもしれないけど。

ともあれ私の身近にいる若い男性はあの二人だけなので、どうしても判断基準になるわけですよ。

そんな風に色々見たり聞いたりしてうちに、彼氏とか別にいなくていいか、と思う

ようになった。

だって、下手に過保護な男が増えたりしたら困るし、彼氏ができたらできたで、あの二人がどういう反応を示すか想像するだけでうんざり。とても彼氏を作る気にはなれない。

これって多分、従姉妹全員に共通する思いなのではないかと思う。だから二十六歳になる真綾ちゃん以下、誰も恋人がいらないのだ。

私たちが恋人を作るには、あの二人と面と向かってやり合う気力と語彙力と気迫が必要だけど、そんな風に情熱を傾けるに値する人には出会えてないということなんだろう。今後、会えるかどうかもわからない。あの二人に対抗できるような人が、私なんかを好きになってくれるとは思えないから。

「あ、まなみちゃん、こっち！」

待ち合わせの駅の改札口で真央ちゃんに声をかけられる。

「今日はありがとうね！」

七分袖の淡いピンクのワンピースを着た真央ちゃんは、とても美人でかわいらしく見えた。それにひきかえ、仕事場から直行した私はいつものように地味なブラウス&スカート姿だ。

うちの会社、男はスーツ着用で、女性はビジネスカジュアルの私服が指定だから、制服のある会社のようにアフターファイブ向けの服を着ていくわけにはいかない。ジャケットを着用したりスーツを着たりして仕事する女の人も多い中、華美な服装などできるはずもなく、できたのはせいぜいフリル付きのブラウスを選ぶことくらい。

私だって大学の時の合コンには、もうちょっとオシャレな服着て行つてただけどな……。真央ちゃんの服装との違いにいささかへこんだ私だったけど、その考えを振り払った。

いや、今日は壁の花になるだけだ。相手を捜すつもりはないし、適当なところで帰るからこれでいいんだ、これで。

「まなみちゃん、どうしたの？」

合コンの会場である居酒屋に向かいながら、拳をぎゅっと握って心の中で自分に言い聞かせている私に、真央ちゃんが怪訝そうに尋ねてくる。おおっと、思いつきり拳動不審でしたか。

「ううん、なんでもない。ところで、この合コンについて透兄さんと涼にはバレてないのよね？」

「もちろんよ。お父さんやお母さんはもちろん、家族の誰にも合コンのことは言っていないもん。今日、私はまなみちゃんと夕飯を食べることになってるし、友達にも口止めし

ておいたから、バレる要素なし！」

「パツチリよ！」と親指を立てる真央ちゃん。ちなみに口裏合わせとして、私も両親には真央ちゃんと食事する予定だと言っている。

だから私の親の口から、あの二人にバレる心配はないと思うのだけど。でも……

「うーん。とはいえ、とにかく用心しようね……」

……この時、私と真央ちゃんは、うっかり失念してたのだ。

普段のあの過保護な従兄弟どもの私たちに関する情報の早さを考えれば、他のルートから合コンのことがバレる可能性もあるということ——

遅れたつもりはなかったけど、どうやら私たちが着いたのは最後の方だったらしい。

居酒屋の座敷席の長いテーブルを挟んで二十人近い男女が座っていて、順に詰めていったのか、空いている席は出入り口に近いところだけだった。

人数合わせ要員だからと一番端の席に陣取ると、私はおしほりで手を拭きながら視線を転じて合コン参加者の面々を観察した。

真央ちゃんの言うとおりの、院生もいるらしくて明らかに私より年上っぽい男女が混じっている。

私は内心ホツとしたものの、やはり院生であつても学生特有の雰囲気があり、どうし

ても場違い感を拭うことができなかった。

それにしても、気になるのは私の向かいの席が一つだけポツンと空いていること。男性側で誰か不参加者が出たのかもしれない。

あれ？ てことは私、参加する必要なかった？

それが気になったのは真央ちゃんも同じのようで、向かいに座っている幹事らしき男の人に尋ねている。

「男の方一人、誰かドタキャンしたの？ 遅れているだけ？」

「いや、実は一人具合悪くてこれないヤツがいてさ。あ、でも副幹事の知り合いが急遽一人来ることになったから心配はいらないよ」

と、彼は答えた。幹事の人もその隣に座っている副幹事の人も、真央ちゃんと同じぜみを取っていて知り合いらしい。年のころも真央ちゃんと同じくらいに見える。

「少し遅れてくるそうだから、気にしないで先に飲み物を注文してくれ」

幹事の男性はそう言うのと、近くにあったメニュー表を渡してくれた。私はそれを眺めながら、真央ちゃんに耳打ちする。

「男性側も来れない人がいたなら、私が来ることなかったんじゃない……？」

「ドタキャンだつていうし、代わりの人が来るんだから、やっぱりまなみちゃんに来てもらつてよかったんだよ」

「そうかなあ……。門限あつて遅くまでいられないんじゃない、かえって迷惑かける気がするんだけど」

「途中で抜ける人も結構いるみたいだよ。合コン好きの友達によると、途中でお持ち帰りされちゃったり、しちゃったりする場合もあるらしい」

その言葉に私はちよつとだけショックを受ける。

「お持ち帰りして……。合コンって携帯番号とかメルアド交換するだけじゃないんだ……」

「いや、大部分はそんな感じだと思っうけど、出会ってすぐに意気投合しちゃったら、その過程をすつ飛ばすこともあるみたい」

「すつ飛ばしすぎじゃー!」

「どっちにしろ、私たちには縁のない話だね。お持ち帰りなんかされたら、透お兄ちゃんと涼にそいつが抹殺抹殺されること請け合ひだし」

なんてことをこそこそ話していると、急に女性陣のざわめきが耳に飛び込んできた。——と、ほぼ同時に男性の声が届く。

「遅れてすみません。お待たせしました」

どうやら最後の一人が到着したらしい。でも、私と真央ちゃんはその声を聞くと同時に、口を開けて固まった。

お互いの顔を見合わせると、そこに浮かんでいる思いは、まったく同じものようだった。

——まさか。

——いや、でもそんなまさか、あいつが?!

「車を停めるところを探していたので、遅くなっちゃいました」

聞き覚えのある声が、いや、非常によく知っている声か返りに響く。

こんなところでは絶対聞きたくなかった、声。

——絶対会いたくなかった、人物。

自分の顔がさあーつと青ざめるのが分かった。警戒レベルは一気にMAXへ。

目の前の真央ちゃんの顔も、すっかり血の気を失っている。

私の体も、凍りついて動かない。かろうじて視界の端で、遅れてきた人物が私の向かいの席に腰を下ろすのを認めた。

こ、これは悪夢……。い、いや、よく似ている声の人っていう可能性も……

確かめたくないけど、確かめずにはいられない。

私はギギギと錆びついたロボットのようなきこちない動作で、無理矢理首を向かいの男の方に向けた。そして向けた直後、一〇〇%後悔した。

無駄に整った顔の男が、うっすらと笑みを浮かべて私たちを眺めていた。私と目が合

うと、にこっと笑みを深める。

黒いのが見え隠れする笑顔を向けながら、その人は言った。

「どうぞ、よろしく」

——瀬尾涼。

真央ちゃんの弟。そして私の過保護な従弟^{いとこ}。

……やっぱり悪夢だ。

「よろしく」と言った彼の言葉が、まったく別の意味に聞こえたのは、私の気のせいじゃないと思う。

かくして、合コンが始まった。

楽しげな男女の笑い声。乾杯のグラスを合わせる音。料理を取り分けたり、飲み物を注文している声が響く。

そんな中、私と真央ちゃんの席だけは、まるでお通夜のようなだった。お互い無言でチビチビとお酒を口にはしているだけ。

原因はもちろん、私の向かいの席に座っているヤツ、従弟の涼のせいだ。

「なんであなたがこんな所にいるのよっ？」

涼の登場直後、何とか衝撃から立ち直った真央ちゃんが小声で詰問^{きつもん}すると、それはそ

れは黒いオーラがダダ漏れの綺麗な笑みを浮かべて言ったのだ。

「それはこっちの台詞^{セリフ}じゃないのかな？ 確か、二人で夕食をとるといっ話^わじゃなかった？」

口裏を合わせて家族にそう言ってきた私たちは、うっと言葉に詰まった。

「真央、まなみ。……あとで二人に話があるから逃げないようにね？ それまでは合コンを楽しむといいよ」

……なあって、にっこり笑って言い渡されて楽しめますか!? 合コンを楽しめだなんて、これっぽっちも思っていないくせに！

私と真央ちゃんが暗い気分になったのは言うまでもない。

だから、テーブルの端から順に自己紹介していくことになった時も、私と真央ちゃんはお通夜真つ最中で、

「瀬尾真央です……よろしくお願いします」

「上条まなみです……真央ちゃんに連れられてきました。よろしくです……」

と言うことしかできなかった。でもこれは仕方ないことだと思うの。

ちなみに涼の自己紹介は軽めで「瀬尾涼です。友人に誘われて急遽^{きゅうそん}出席することにになりました」と言ったただけだ。そのため、他の女性陣の興味を誘って、あちこちから質問の聲が上がっていた。

「——ええ、大学四年生です」

「——学部ですか？ 経営学部です」

「——就職先は、おかげさまでもう決まっています」

とか、私と真央ちゃんが憂鬱ゆううつにさせておいて、その原因を作ったヤツは外面そとづらの良さを發揮して女性陣とにこやかに話している。

でも、分かるのですよ……、私たちには。どんなに笑みを浮かべようと、どんなに礼儀正しく女性に答えてようと、依然としてヤツが黒いオーラを発していることが。

機嫌悪きげんあく！ いつもなら私たちにしか腹黒な対応はしないのに、今日はその外面のメツキが若干剥はがれかけているようだ。

これってやっぱり私たちのせいだろうか。機嫌が悪くなるくらいなら、こんなところまで邪魔まじりに来なければいいのと思うのだけど。いつものことながら、腹黒なヤツの考えていることはよく分からない。

そんなことを思いながら涼の動向を横目で窺うかがっていると、ずうーんと重い空気をまとってチビチビお酒を飲んでいた真央ちゃんがいきなり覚醒かくせいした。

真央ちゃんはずっと持っていたビールのジョッキをダンツとテーブルの上に乱暴に置くと、向かいの男性陣に鋭い視線すずとを走らせる。そして、私たちの様子を窺うかがっていた男性のうち、唯一ハッと視線を逸らした人物を、すさまじい目つきで睨にらみつけた。

視線で人が殺せるなら、きつとこの場で彼は絶命すうめいしていたんじゃないかと思うほど苛か烈りつな視線だった。

——『あんたか！』

真央ちゃんがほとんど口も動かさずにつぶやいた声を、私は確かに聞き取った。隣にいるから、真央ちゃんが奥歯をギリギリと噛み締めている音まで聞こえてくる。

ああ、やっぱりね……。私は梅サワーをちびちびと口に運んでため息をついた。かねてから疑っていたことが、これで証明されたようなものだ。

今夜のことはお互いの親から漏れるはずがない。だって私も真央ちゃんも、いつさそんなことは言っていないから。そして真央ちゃんは友達にも今日の合コンのことは極力話さないようにして、参加する女友達にも自分が来ることを漏らさないように口止めしてあったのだ。

なのに涼はここにいる。

誰かが真央ちゃんに参加すること——おまけに従姉いとこの私を連れてくることを、涼に告げたとは思えない。それしかあり得ない。

いえね、私が大学生の時からちよつと疑っていたのですよ。

今回のように合コンに直接乗り込んでくることはなかったけど、いくら隠しても透兎とらさんと涼は私が合コンに参加したことを知っていた。まあ、私の電話を盗聴ちゅうちやうしていれば

私がいつどこで合コンに参加するのかわかることができるかもしれないけど。

でも、あの二人は合コンの場で起こったことも知っているようだった。誰かに聞かないと、それは絶対にあり得ない。となると、それを知らせた人間——私の動向をスパイして知らせている人がいるってことじゃない？

私は大学生の頃はサークルにも入ってなかったし、多分クラスメイトでよく行動を共にしていた女友達のうちの誰かが私の動向を教えていたのだと思うけど、真央ちゃんのスパイは副幹事の彼だったみたい。

私を連れて来ることまで知っていたあたり、真央ちゃんの向かいにいる幹事の人が一番怪しかったりするけど、副幹事の人も、いろいろセッティングを手伝っていたみたいだから、前もって彼も私が今日来ることを知ってもおかしくない。それに幹事の人はさつき涼のことをはっきり「副幹事の知り合いが」って言ってたから、間違いないと思う。

……これはあとから真央ちゃんに聞いたのだけど、副幹事の人は、なんと瀬尾エンジニアリングに就職が決まっているのだそう。それを聞いて納得した。

真央ちゃんの動向を探って涼か透兄さんに報告していた人は彼だけじゃないのかもしれないけど、間違いなく彼もスパイの一人だろう。

スパイの存在が確定したところで、ちょっと背筋が寒くなった私だ。だって、私の大学時代に怪しい影があつたつことはさ、今も会社にそういった人材を配置している可

能性があるってことでしょ？

同じ部署か違う部署か分からないけど、私の動向とか伝えている人がいたり……して……

しゃ、洒落しやにならないよおおお！ 大学時代ならともかく、社会人になっても安心できないなんて、そんなの想像したくもないんですけど！

でももし会社関係の合コンに内緒で行って、その時の様子を透兄さんとか涼が知っていたりしたら……

ゾツとした。いや、考えるな私！ 考えたらドツボにハマるぞ！！

涼を問いただしたい気持ちを抑えて、私は念仏のように「気のせい、気のせい」と心の中で唱え続けたのだった。

その涼は相変わらず周囲には分からない黒いオーラを撒き散らしながらも、彼目当てだと思われる女の子の質問に律儀に答えていた。

「瀬尾さんは、彼女とかいるんですか？」

一人の女の子が質問する。合コンに参加する人はだいたいシングルのハズだけど、涼がピンチヒッターということは誰もが知っているから、彼女たちはこの質問をしたようだ。話しかけている女の子たちだけじゃなくて、周囲もおしゃべりをパタッと止めたところを見ると、みなさん知っていたことらしい。

肝心の涼は視線を一身に浴びながらも余裕の笑みで、さらっと答えた。

「さあ、どうでしょうか。想像におまかせします」
 何よその意味ありげな回答は。……別に隠すほどのことじゃないんだから、いるのかわからないのか、はっきり言えればいいのに……と思うのは私だけではないはずだ。涼に彼女がいるなんて話は聞いたことないから、単に女避けのためにはぐらかしているに違いない。

私としては、とつとと彼女を作つて欲しい。恋人ができれば過保護にする対象が彼女に移るだろうし、従姉の私生活を監視する時間も暇もなくなると思うんだ。

「やっぱり彼女いるんだあ。残念」

質問した子は、どうやら彼女がいると解釈したらしい。

とはいえ、そもそも彼女がいる人間が合コンに参加するものだろうか。私なら彼女がいるなら人数合わせでも合コンなんか行くな！ って言う。

そう思ったのは、どうやら私だけではなかったらしい。明らかに涼が気に入らないという顔をしている男の人が何人かいる。

私はなんだか、その人たちに申し訳なくなった。だって、涼がこんな所にいるのは間違いなく私たちのせいだから。

ふと隣を見ると、真央ちゃんはスパイ容疑をかけている副幹事を睨みつけるのをやめて、ビールジョッキを片手にヤサグレモードに入っていた。
 ブツブツ小さな声で何か言っているのを、耳を澄まして聞いてみると――

「……覚えてなさいよ。あんたをモデルにして実名でBL本出してやる。あんたは受けよ、受けキャラよ。ヤラれちゃえばいいんだ」

と恐ろしいことをつぶやいている。

副幹事さん。どうやら真央ちゃんの描く漫画の中で、貞操の危機を迎えてしまつてるみたいですね。私は漫画になった時の彼の相手が気になった。……やっぱりここは腹黒キャラだね……って、私つては何考えてんでしようか！ そんな場合じゃないのに！

「真央ちゃん、気を確かに。実名はまずいよ。名誉毀損で訴えられちゃうよ」
 小声で注意するも、真央ちゃんに一蹴された。

「ふん。だったらこつちだって私生活を売られたんだから訴える資格あるよね！ 私のプライバシーを侵すなつてんだい」

あ、あれ？ 真央ちゃん酔つてる？ 酔つてます？

何だか目が据わつてるけど、涼と副幹事さんへの怒りでアルコールの回りが早くなつてしまったのだろうか。心配している私の目の前で、ビールをぐびぐび飲み干す真央ちゃん。

あ、またお酒注文しちゃつてるし！

真央ちゃーん、腹黒な涼の目の前でヤケ酒なんてしたら何言われるか分からないぞ？
 案の定、ヤサグレてやけ酒をあおっている真央ちゃんと、それを見てオロオロする私に、
 涼の冷たい視線が注がれる。「何やってるのさ？」という涼の心の声が聞こえてきそうだ。
 「瀬尾さんはお酒、駄目なんですか？」

さつき彼女はいるのかと質問していた子が、ふたたび涼に声を掛けた。

どうやら、涼がいたくお気に召したらしい。さつき彼女がいるっぽいニュアンスを汲み取って身を引いたのかと思いきや、あわよくばという心情が透けて見える。質問自体は至極まっとうなものなんだけど、口調が甘ったるい。

モテ男の涼は、そんな風に媚を売られるのも慣れたものらしく、適当にあしらってようだけだ。

「いえ。お酒は飲みますよ」

「でも、今飲んでるのはお酒じゃないですよね」

確かに涼が持っているのはウーロン茶。ウーロンハイでもビールでもなく、ノンアルコールのドリンクだった。

「今日は車で来ているので、アルコールは控えてるんです」

「少しくらいなら平気じゃない？」

「いえ——」

と言って涼は一瞬思わせぶりに言葉を切ると、質問してきた彼女及び興味津々で会話を聞いている人たちに視線を向けてから、ふたたび口を開いた。

「これから人を送る予定なので、安全運転しなくちゃならないんです。そうでなくてもアルコールはまずいでしょ」

その台詞はごくごく当たり前のものだった。だけどそれを聞いた途端、ぞくつと一瞬だけ背中に悪寒が走ったのは気のせいだろうか。ものすごく悪い予感がする。

「もしかして彼女？ このあとデートだったりするの？」

「いいえ、違います」

涼はにっこり笑うと、私たちの方にいきなり視線を向けた。

ヤサグレモードに入っていた真央ちゃんの反応は遅れたけど、私はしつかり涼の笑顔に黒いものを発見してしまつてビクツと身体を震わせた。そんな私に冷笑を向けて涼は言った。

「姉と従姉を送り届けるんです。——ね、二人とも。そうだよね」

そんなの聞いてません、知りません！ ってか、あっさり親類だとバラさないですよ!!
 顔を引きつらせる私たちと、私たちをじっと見つめる涼を交互に見て、周りの人たちは気付いたらしい。幹事の人がハツとして言った。

「そういうえば瀬尾って名前……偶然同じ名字なんじゃなくて……姉弟だったのか？」

「ええ。そうです。俺の斜め横に座ってるのが姉で、向かいが従姉いとこです。偶然同じ合コンに行くことになったので、帰りは送ることになってるんですよ」

うわーお。よくそんな嘘が、ぺらっぺらと口から出るもんだ。

思わず感心するよ——って、そうじゃなくって！

「ちよつと……」

真央ちゃんが反論しようとした途端、涼の笑顔に黒いオーラが増した——。その笑顔が、そして笑っているのにちつとも笑ってない目が「何か文句ある？」と言っている。

こっちは嘘をついて合コンに出席している手前、強く出ることができない。

「い、いえ。何でもない……」

真央ちゃんがしおしおと萎しおれて白旗を掲げるのを、なんともいえない気分で見守った私だった。

結局、私たちがあまりにも暗いものだから、周りの人は遠慮してあまり話しかけてこなかった。無情にもそのまま私の門限が近付き、真央ちゃんともども涼に促されて合コンを抜けることになった。参加者の頭の中は、「あの子たちは何だったんだろ？」と疑問符でいっぱいではない。姉弟で合コンに参加するわ、テンション低いわ、途中で帰るわ……。けれど申し訳ないが、彼らを気遣う余裕はなかった。

出荷される家畜のような心境で居酒屋を出る私たちに、相変わらずの黒い笑みを貼り付けた涼は言う。

「車を回すから店の前で待っていて。……逃げようだなんて思わないでね、二人とも？」

青ざめながら首を上下にガクガク動かす私たちに、涼はなおも言う。

「よろしい。逃げて、自分の首を絞めるだけだからね。大人しく待っているように」

そうして私たちに釘くぎをさしてスタスタと駐車場の方へ行く涼のうしろ姿を見送り、私と真央ちゃんは「はああ」と同時に深いため息をついた。

「うう。まなみちゃんゴメンね。まさか涼がくるなんて！」

「真央ちゃんのせいじゃないよ」

それにしても、大学時代私が合コンに参加して叱責しっせきを受けるのはいつも事後だったし、表立って参加を阻止そしされることもなかったのに、どうして今日は……

こんな風に直接妨害を受けたのは実は今回が初めてだった。

——まあ、裏ではどうだかわからないけど。

でも待てよ、そういえば前に似たようなケースがあったかも。あれは確か、真綾ちゃんと舞ちゃんが二人揃そろって半分騙だまされ、上流階級の方々が集まる食事会という名の合コンに参加した時のこと。透兄さんと涼が二人して乗り込んで、妨害したなんてことがあったような。

……ということとは、従姉妹が二人以上参加すると妨害工作に出るとみていいのではないだろうか。そんなこと分かってても、ちっとも慰めにはならないけど。

「うー。あいつー」

こんなことになった原因——涼の子飼いのスパイである副幹事さんに対する恨みを、真央ちゃんはふたたび募らせる。

「あいつが参加する合コンには、金輪際行かないんだから！」

「まあまあ。監視されているのは気分よくないけど、きつと真央ちゃんが酔っ払って変な男にお持ち帰りされそうになったら、副幹事さんが助けてくれることになってたんだよ。あれだ、アレ。防衛システムだと思えば……って、思えないか……」

慰めようとして言ったものの、わが身に置き換えてみたらとてもじゃないけど平常心ではいられなくなった。監視されているなんて、冗談じゃない。

合コン時に発動する防衛システム以前に、日常生活を常に監視され、あの二人に報告されているなんて考えるのも嫌だ。いやいや、うちの会社にスパイなんていないんだからっ。

「思えないよお！ 防衛システムなんていららない」

両手を目に当てて、しくしくと泣く真似をする真央ちゃん。

「だよね。いらぬよね！ ……ったく、どこまで過保護なんだか。ここまでくると異

常だよね。この間だって透兄さんってば……」

いつものごとく透兄さんと涼の愚痴を言っていた私は、すぐ近くまで迫っていたトランプルの元に、全然、まったく、気付くことができなかった。

「上条さん？」

「ふあ？」

名前を呼ぶ声を聞き、その直後に私は青ざめた。

こ、この聞き覚えのある声は……！

「上条さんじゃないか？」

ふたたび名前を呼ばれて、脳内データベースで声の主を超高速で検索する。そして一人の人物に思い当たった私は息が止まりそうなくらいドキッとし、恐る恐る振り返った。そこにいたのは——ここでは絶対会いたくなかった人。

「やっぱり上条さんだ」

軽く驚きつつ笑顔を見せる仁科係長——佐伯彰人さん——が美人を連れて、数メートル先に立っていた。

……あれ？ 一難去ってもいないのに、また一難？

「に、仁科係長」

とっさに思ったのは、なにやら色々マズイ！ ということだった。

私の隣には三番目の許婚候補の真央ちゃんがいて、もうすぐここに涼も戻ってくる。ハイソな世界に身を置く三人は、その手の上流階級の集まりで一度くらい顔を合わせたことがあるかもしれない。

それもそれでマズイけど、私が何よりマズイと感じたのは「合コンなんて行きませんよ」と昨日豪語しておきながら、その舌の根も乾かないうちに合コンに参加している私自身の身の置き場だった。

これは何だか色々マズイしヤバイぞ！

「居酒屋の前で何を……、ああ、会社関係の人と飲み会か何か？ あれ？ でも今日はそんな予定なかったような」

ダラダラと嫌な汗をかいている私をよそに、係長は気軽にそんなことを聞きながら傍に寄ってくる。その距離、約一メートル。お互いの表情が見えてしまうくらいの近さだ。できるなら、もっと離れたところから挨拶する程度で別れたかった……そう思う私は部下として薄情だろうか。

——っというか、女連れの時に部下とはいえ他の女に声掛けるなど言いたい！

私はちらつと係長の斜めうしろに控えている美人さんに目を走らせた。この人はきつと水沢さんが前に言っていた、日商社で営業課長をしている岡島さんだろう。

小さな商社とはいえ、営業課長まで昇りつめたやり手のキャリアウーマンで、あの恋愛が長続きしないと噂の係長と、もう半年以上も付き合っているというツワモノだ。年齢はええつと、二十九歳だったかな？

きりつとした美人で、いかにもデキる女っぽいデザインながら、女性としての魅力も引き立てる桜色の素敵なスーツを着ている。

——だけど。

あれ？ と私は内心首をかしげた。

夜目だからだろうか。岡島さんの表情が、暗いというか青ざめているように見える。

一応、笑みらしきものを浮かべているけど口元は強張っていて、無理に笑っているような印象なのだ。

「上条さん？」

岡島さんの表情に気を取られていた私は、ハツとして係長に視線を戻した。

あ、何か聞かれていたんだっけ。……ええと、何だったかしら？

「飲み会をしたのか、つてさ」

横から真央ちゃんがこそっと耳打ちしてくれた。あ、そうだった。

「えつと、えーつと、会社関係ではない人たちとの飲み会に参加してまして」

あとから考えてみれば「二人で飲んでました」とか言えばよかったのだ。だけどこの

時は慌てていて、そんな風に誤魔化ごまかそうとしていた。それがかえって、係長の不審ふしんを招くとは夢にも思わずに。

「会社関係ではない飲み会って、何？」
すかさず笑顔で聞いてくる係長。そこまで深追せんぞいされるとは思ってたかった私はたじろいだ。

「えっと……」

何で偶然出会った部下の飲み会について、こんなに詮索せんさくするのだろう。そう思いながら何て言おうかグルグル考えてると、私と係長の昨日のやり取りなんてまったく知らない真央ちゃんが横からあっさり言った。

「私たち合コンに参加してたんです」

「ま、真央ちゃん！」

ぎょっとしたのは私だ。「合コン」という言葉を告げるわけにいかないから、四苦八苦していたというのに！

「……合コン？」

聞き返す係長の声が若干低くなった。しかもメガネの奥の目が、疑わしげにすーっと眇すめられたような……

「へえ、合コンねえ……。会社の連中の企画する合コンは、門限があるからって断って

たのに？」

ひいと私は青ざめた。声低い！ なんか恐い！

私はアワアワと手を横に振りつつ、慌てて言い訳した。

「も、門限があるからもう店を出たんです。それに、きよ、今日のは従妹いとこの付き添いで参加しただけです！ 急遽きゅうそ頼まれまして！ ただの人数合わせなんです！」

焦あせりのあまりポロツと本当のことを口に出した直後、私は激しく後悔した。ああ、従妹いとこって言っちゃった！ 案の定、係長の視線が私の横にいる真央ちゃんに向く。

外気はひんやりしていて寒いくらいなのに、私は嫌な汗が背中を一筋流れるのを感じた。顔を合わせて欲しくなかった。できればこの場を、穩便おんべんにすませたかった……！
でもそんな私の動揺をよそに、隣の真央ちゃんは屈託くつたくなく係長に話しかける。

「本当です。今日は私がまなみちゃんに無理言っいきなり参加してもらったんです。

もちろん門限があるの分かってます。だから途中で抜けて、これから帰るところなんです。あ、大丈夫ですよ。私の弟も合コンに参加してまして、ヤツ、いえ、彼が車でまなみちゃんを送ることになってますから。責任持ってちゃんと家に送り届けますって」

私はヒヤヒヤしながらも「そうそう」と真央ちゃんの言葉に相槌あづきを打った。

「これから帰るところなんです。従姉妹いとこのよしみで参加しただけですから」

人数合わせで仕方なしに参加しただけ。そう強調して言ったからか、

「そうか……。まあ、それなら安心、かな」
と返答する係長の声はいつものトーンに戻っていて、私は胸を撫で下ろした。
係長の様子が元に戻ったのもさることながら、この二人が顔見知りじゃないって確信が持てたことに深く安堵したからだ。

よくよく考えてみれば、真央ちゃんは社交界の集まりには全然参加しないから、この二人が顔見知りの可能性はとも低かった。今年の正月にお祖父ちゃんの家で婚約話をした時も、真央ちゃんはおろか舞ちゃんも会ったことがないようなことを言っていたし。確認してないけど、たぶん婚約者として三条が佐伯に紹介しているのは舞ちゃんだけなんだと思う。三条家が他の三人のことを佐伯さんに言っていたら、私のこともとつくとバレてるはずだろうから。

ホッと安堵の息を吐く私をよそに、私の上司と従妹の会話は続く。

「君は上条さんの従妹？」

「はい。瀬尾真央っていいいます。ええと、まなみちゃんの会社の方ですよね？」

「ええ。上条さんとは同じ部署で、係長の仁科といいます」

「お若いのに係長さんですか！ すごいですね」

オイオイ。二人とも、私と係長の彼女を無視してなに世間話してるの？

それよりも問題なのは——真央ちゃんが、目の前の人が誰だか気付いてないってこ

とだ。

そりゃあ、係長は名字しか名乗ってないし、釣書の写真とは髪型が違うし、メガネをかけてるから別人に見えるけど……

——真央ちゃん？ その人、佐伯彰人さんですよ？ 舞ちゃんの（暫定的な）婚約者で、私たちが許婚候補でもある例のお人ですよ？

心の中で呼びかけてみるけど、テレパシーが使えるわけではないので、一向に気付いてもらえない。きつと美形を目の前に舞い上がり、深く考えてないのだろう。

ああ、真央ちゃんの頭の中でB.L的な妄想が膨らみ、萌えているようだ……

とはいえ、真央ちゃんが無意識にポロッと何か言うのではないかと気が気じゃない私は、早くここから係長を立ち去らせたい思いでいっぱいだった。それにもうすぐ、涼も戻ってきちゃうし。

涼といえは正月に「佐伯彰人さんが誰か孕ませて、責任とって三条とは関係ない女と結婚してくれるのが一番いい」とか言ったヤツですよ？

その涼が仁科係長（しかも女連れ）と顔を合わせるだなんて、恐ろしくて想像すらしたくない！

ごまかそうとしても、察しがいい涼は係長の正体に即気付くだろう。そしたら——
アイツは言う。絶対何か言う！

透見さんはこの間うちの会社に来た時、かろうじて正体がバレるようなことは口にしなかつたけど涼は違う。腹黒いから、私が隠したいことをワザと口に出すだろう。

こうなったら、絶対二人を会わせちゃ駄目だ！

私は意を決して係長と真央ちゃんの会話に割り込んだ。

「係長、今日はデートですか？」

ちらりと岡島さんを見ながら言う。彼女は相変わらず強張った顔に、無理に笑みを貼り付けているように見える。

「金曜日の夜でもんね。デート日和びよりですね」

「だから私たちのことは放っておいて、デートに戻ってくださいね」と、心の中で付け足す。

ところが、私の期待を裏切り彼は「そうだね」とにっこり笑うだけだった。その笑顔は……笑っているのに本当の心情をうかがわせない種類の表情だ。詮索せんさくはするなど言っていないかのよう。

返答も、えらく他人事のように聞こえた。

それに——さつきから係長、全然岡島さんの方を見ようとしない。

さすがに恋愛経験ゼロの私でもピンとききましたよ。この二人の仲が今、危機的な状況にあるってことが。

岡島さんの様子からして、もしかして別れ話をしたのかもしれない……

私はちよっぴり遠い目をした。どういう星の巡り合わせで、破局しそうな上司のカッブルそっくに遭遇しなければならぬのだろうか。よりによって、涼がもうすぐやつてくるというこの状況で。

「ちようど俺たちも帰るところだね。彼女をタクシー乗り場まで送っていく途中だったんだよ」

相変わらず斜め横にいる岡島さんを見もしないで係長は言う。その言葉を聞いた彼女が唇を噛み締めるのが目に入って、私は何かいたたまれなかった。

「そ、そうですか」

まだ夜の九時前ですけど、帰るところですか……。社会人同士の恋人の、金曜夜のデートにしては切り上げるのが早すぎる。

やっぱ破局かなあ……

彼にしては珍しく半年も持ったのに、禁句である「結婚」の二文字を彼女が言ってしまったのだろうか。

恋愛に疎い私の目にも、岡島さんが係長に未練があるのはまる分かりなのに。ほら、今だって岡島さんは係長を見ている。強張った笑顔で、どこか必死の目で。

なのに、そのすべてを係長はシャットアウトしている。……そんな風に見えた。

「ところで君たちは大丈夫？　ここは歓楽街だから、店先とはいえ女の子二人でいるのはよくないと思うけど。ナンパや酒に酔った奴に絡まれるかも……」

「い、いえ、大丈夫です！　従弟が駐車場に車を取りに行ってるのを待っているだけですから！」

私は慌てて言った。私たちに気を遣った係長が「車が来るまで護衛代わりに傍にいよう」とか言い出さないと限らない。何か安心させるようなことを言わなければ！

「もうすぐ来ますから平気です！　係長こそ彼女を待たせちゃ悪いですよ」

というか、涼が来る前に早く去って下さい！

「そうか。それじゃ行くけど、くれぐれも気をつけるように。ナンパされても無視するんだよ？」

にっこり笑って忠告した係長は手を伸ばし、あろうことか私の頭をくしゃつと撫でた。真央ちゃんの目の前で、恋人である岡鳥さんの目の前で！

真央ちゃんと岡鳥さんはその光景に目を見開いていた。直後、岡鳥さんの顔が歪んだような気がするけど、あいにく係長に抗議しようと彼を見上げた私には、確認することができなかつた。

「か、係長、こんな往来でいきなり何するんですか」

乱れた髪の毛を手で整えながら睨みつける。けれど係長はちつとも悪びれず笑った。

「つい癖が出て。上条さんの頭、ちょうど撫でやすい位置にあるからね、つい……」

確かに私の頭は係長の胸の位置。手を伸ばせば撫でやすい位置なのは否定しない。けれど、社外でまで「つい」と言って頭を撫でられるのは反応に困る。

「係長……私、子供じゃないんですけど……」

「子供だなんて思っていないよ。大事な……部下だと思ってる」

うわ。今、ベツトと言おうとしたよ、この人！

ふたたび恨みがましく睨みつけると、仁科係長はクスツと笑った。どうやら、からかわれたらしい。頭を撫でたのも、そのからかいの一環だったのか。

「じゃ、また来週ね。上条さんと従妹の……ええと瀬尾さんも。うちの会社の男性社員も、なかなかいいのが揃っているから、合コンの機会があればぜひ」

係長は真央ちゃんに向かって実に爽やかにソツなく、でも私にとっては心臓に悪いことを言った。

お願いしますから、社交辞令でもそんなこと言わないで下さい。真央ちゃんをうちの会社の合コンなんかに入れて行ったら、私が透見さんと涼に殺される！

私が顔を引きつらせている横で、何も気付いていない真央ちゃんは満面の笑みを浮かべて言った。

「わあ、ありがとうございます。過保護な弟と従兄の息がかかった人のいない合コンな

ら、ぜひ参加したいです！」

ま、真央ちゃんーん!!

私は声にならない悲鳴をあげた。

真央ちゃんの返事を聞いて、係長はちよつと驚いたように瞬きする。

「弟さん、過保護なんだ」

「はい。弟と従兄のダブルパンチで。今日の合コンも、私たちに内緒でいきなり参加した拳句、途中で切り上げさせられたんですよ」

「はは、それは大変だ。でもこんな美人揃いの親戚がいたら、弟さんが心配するのにかかる気がするけど」

「過剰なんです」

汗ダラダラで心臓バクバクのまま固まる私の横で、ギリギリな会話が交わされている。止めなきやと思うものの、恐慌状態な今の私には「ひいひい」という奇声しか出せそうにない。

いや、いつそのこと奇声をあげた方がいいのかも。変人扱いされて、今すぐこの心臓に悪い会話を止められるかもしれないから。背に腹はかえられないと息を吸い込んだところで——意外なところから助けの手が

差し伸べられた。

「そもそも、まなみちゃんの門限だつて奴らが条件つきで——」

「彰人さん」

真央ちゃんの言葉に、小さな、でもはつきりした岡島さんの声が重なった。

ハツとして岡島さんの方を見た私の視界の端に、今夜道端で声を掛けられて初めて、係長の視線が彼女に向けられるシーンが映った。

三人の視線を一身に集めた岡島さんは、相変わらず無理に作ったような笑みを美しい顔に貼りつけ、係長の顔を見上げていた。

「……私、先に帰りますね。送ってもらわなくてもタクシー乗り場は近いから大丈夫です」

「……いや」

係長は静かに首を横に振った。

「送っていくよ」

そう言った声も表情も淡々としていて、感情がまったく窺えなかった。でも、次に係長が振り向いて私たちに向けた表情は優しい笑顔だった——

「それじゃ、俺たちは先に失礼するから、気をつけて帰りなさい」

告げられる言葉も、優しい口調で優しい声で……その落差に何だか胸が疼いた。

痛みでもなく、喜びでもなく、考え込んだら涙が出てしまいそうになる想いに胸が詰まる。

「はい、係長。また来週」

答えた私の声は、ちよつと震えていたかもしれない。それに気付いたのか、そしてそれをどう思ったのかは分からないけれど、係長は私の横を通り抜ける直前、ふと腕を伸ばして私の額をコンツと軽く叩くと、悪戯っぽい笑みを浮かべて言った。

「酔っ払いやナンパに気をつけること。いいね?」

去っていく彼らを額に手を当てて見送る私の横で、真央ちゃんが能天気な声を上げる。

「かつこいい上司じゃないの、まなみちゃん! Bリーマンにはね、ああいう美形眼鏡エリートキヤラは必須なんだよね。いやあ、生で見れるなんて! 眼福、眼福」

真央ちゃんが楽しそうに語る内容と、度重なる精神的ストレスから解放された安堵感やら何やらが一気に押し寄せ、私はその場に脱力してしゃがみ込んだ。

何かものすごい疲労感が……。でも、まあ、とりあえず涼が来る前に係長に立ち去ってもらえた。秘密は守られた。……。それだけでも良しとしよう。

「あれ? どしたの、まなみちゃん?」

「……力が抜けた」

「上司と喋るの、そんなに緊張したの? あ、もしかしてあの人、まなみちゃんの好きな人だったりする?」

「……違う」

差し伸べられた真央ちゃんの手を取って、よいしょと立ち上がった私は、深い深いため息をつきながら言った。

「真央ちゃん、今、係長と会ったことは涼には内緒ね」

「え? 何で? やっぱりまなみちゃんとあの人の中に何かあるの? ちよつといい雰囲気だったし……」

「何もありません! ……あの人、佐伯さんなの。例の舞ちゃんの許婚」

私の言葉を聞いた直後、真央ちゃんは目と口をポカーンと開けた。

「え——!?!」

仰天する真央ちゃんに、私は恨みがましく言った。

「彼が例の『佐伯彰人さん』。会社では仁科姓を使ってるから、佐伯とは名乗らなかつたけど。もう、何で真央ちゃんってば気付かないの? 釣書の写真見なかつたの?」

ビックリ眼のまま首をブンブン横に振る真央ちゃん。

「いや、見たよ、見たけど。一回だけだったし、写真は眼鏡かけてなかったし、髪形違ってたから……って、ええええ!? あの人が佐伯彰人さんなのっ?」

「あの眼鏡と髪型は変装用みたい。前に残業中、眼鏡なしで書類を見ているところを目撃したことがあるから、伊達眼鏡なんだと思っ」